

〈書評〉

大島正二著

『中国言語学史』

遊佐 徹

私はかつて本書『中国言語学史』の著者、大島正二先生のいま一冊の「中国言語学史」である『辞書』の発明——中国言語学史入門』（三省堂 一九九八年刊）にささやかな書評を献じた際（中国書籍情報誌『東方』一九九八年八月号 一八〇—二〇〇頁）、その冒頭に次のような回想を書き記した。以下、それを再録する。

私が、本書『辞書』の発明』の著者、大島正二先生からはじめて中国言語学史執筆の構想についてのお話を伺ったのは、もう十年も前のことである。当時、私は大学院生で、演習のテキストである王力の『中国言語学史』や『漢語音韻史』を読みながらその構想のあれこれをお聞きするのはとても楽しい時間であった。その後、それらは周到な準備の積み重ねのうえに、昨年と今年二冊の書物として結実した。『中国言語学史』と本書がそれである。

この私なりに著者の二冊の「中国言語学史」成書前史を語った一文において、実は、書き漏らしたことがあった。それは——これも

やはり御本人より直接伺った話であるが——そもそも、著者の「中国言語学史」への関心を喚起したのが王力の『中国言語学史』（以下、王書と呼ぶ）であり、一時はその全訳をも計画されていた、ということである。

改めていうまでもなく、王力（一九〇〇—八六年）は中国言語学界における巨星であり、その『中国言語学史』（もと『中国語文』一九六三年三期—一九六四年二期に連載、のち第四章を加え、一九八一年山西人民出版社より刊行）は、それによって、はじめて先秦より新中国成立にいたる「中国語」に関する研究の歩みが全面的かつ体系的に私達に提示されることになったという点で先駆的研究であったとともに、その後の中国における「中国言語学史」研究を方向付けるものとなった（例えばその後、王書を継いで、何九盈『中国古代語言学史』河南人民出版社 一九八五年、濮之珍『中国語言学史』上海古籍出版社 一九八七年等が生まれている）という点において画期的な業績であった。

著者は、このような先駆的、画期的「中国言語学史」の刊行に触発されて「中国言語学史」研究をその研究テーマのひとつに設定し、十分な時間を費やし周到な準備を重ねたうえで我が国における先駆的、画期的研究である本書『中国言語学史』および『辞書』の発明——中国言語学史入門』を上梓されたのである。したがって、本書の特徴を明らかにするうえで、王書との比較を行うのは、ひとつの有効な手段であると思われる。以下、先ずはこの見地に立って、本書の世界に分け入ってゆくことにしよう。

○叙述の対象について

著者は、「前書き」で本書における「言語学」の意味を「文献学 (philology) をも含めた広義の言語研究」と定義したうえで、叙述の対象を「今日の価値判断に拠るならば、言語学の範疇から外れると思われるような研究や著述の類い」にまで広げたと述べている。

それは、一九世紀の比較言語学に始まる近代言語学、二〇世紀のいわゆるソシュール革命を契機とする現代言語学の枠組みに拠って考察するだけでは、中国言語学の多様な成果と歴史的全体像を描き出すことがとうてい不可能だからである。こうした「中国言語学史」研究における「言語学」の性格の規定は王書によってすでに行われている。すなわち、王力は「前言」において彼がこれから語ろうとする「中国言語学史」の「言語学」とは「最も幅広い意味を適用した」ものであり「中国が五四以前においてすすめた言語研究は、おおむね文献学（王力の用語では「語文学」）の範囲内に収まるものである」、「文献学は中国の言語研究において支配的地位を占めること二十年の長きにおよんだ」と述べて、「中国言語学史」の研究には文献学の研究が必要不可欠のものを指摘している。

その結果として、両書は、先秦より今世紀までを扱う「通史」としての性格を十分に發揮することになったとともに、二千年以上におよぶ歴史のなかで現われた膨大な量の研究、著述、文献そしてそれを生み出した研究者、著述者を網羅して読者に示す「事典」的役割を果たすものとなった。実際、王書では二百部（篇）あまりの著述と一四〇名の人物（『中国現代語言学家』河北人民出版社 一九八一年の集計による）が取り上げられ、本書においてはそれをはるか

に上回る数の著述と人物の紹介がおこなわれ（しかも、索引が完備している）ており、まさに「中国言語学事典」のおもむきを呈している。しかし、「事典」的役割を果たしているからといって、それはあくまでも「結果として」であって、両書の内容と価値が「研究や著述の単なる書誌的・解題的な説明や列挙」のみに留まるものでないことはもちろんである。「中国言語学史」としての両書の真の価値は、それら膨大な数にのぼる研究、著述、文献そしてその執筆者、著述者がどのように「中国語」研究の歴史を形作ってきたのか、すなわち、著者大島先生の表現を借りれば、「どのような著者によって、中国語のどのような領域・事象が興味や考察の対象とされて、それ等に関わる研究や著述がどこまで進められ、それがどのように継承されてきた」のか、を明らかにしている点にこそある。それではその手法とはいかなるものであるのだろうか。次に、この点について考えてみることにしよう。

○構成について

前述したような膨大な数にのぼる叙述の対象に拠って「中国語」研究の歴史——「学史」をたどってゆく際、先ず第一に必要なのは、それらを整理する方針を立てることであろう。これは取りも直さず「学史」の「骨組み」を決定することでもある。

本書におけるそれは、

・序 章

・第一章 義書—訓詁学

・第二章 字書—文字学

・第三章 韻書—音韻学

・第四章 等韻図—等韻学

・第五章 清朝における言語研究—考証学

・第六章 近代における言語研究（一九四〇年代）

である。この構成を王書および王書に連なる類書のそれと比較するとき、本書の大きな特徴が浮かび上がってくる。すなわち、後者の構成が基本的に叙述の順序を歴史時間の進行に合わせたものであるのに対し、本書は伝統的な「中国語」研究の領域に合わせて叙述を進める構成を採用している。具体的には、著者が中国における「中国語」研究の特徴を概述した序章——ここで、中国における「中国語」研究が実質的には「漢字」研究であり、「漢字」の構成要素である形・音・義に対する研究が、ヨーロッパ言語学が導入される近代まで主流であり続けたことが語られる——において示す伝統的な研究の枠組み（訓詁学、文字学、音韻学、等韻学）に従う形で第一章から第四章を構成するのである。これによって、中国人自身の「中国語」への関心のありようを生かす形で「中国語」研究の歴史を語る事が可能になったばかりではなく、それぞれの領域における叙述の体系性が確保されることになった。そしてさらには、この構成によって、読者は「中国訓詁学史」、「中国文字学史」……といった「中国言語学史」のいわばモノグラムに対する理解を深めることが可能になるのである。例えば、第二章においては、字書の歴史がその誕生の前史（前漢）に続いて文字学史上の「不滅の金字塔」とされる『説文解字』の成立（後漢）とそれ以降の明代にいたるその継承と展開の諸相（『字林』、『玉篇』、『類篇』）およびそれからの脱

却の過程（『龍龕手鑑』、『五音篇海』、『字彙』）を軸に、著者が重視する文化史的視点（後述）に立って立体的に叙述されており、読者はそこから中国文字学の重要研究、著述に対する知識ばかりでなく、中国文字学史の展開についても十分な理解を得ることが可能になるのである（この点において、第一章 義書—訓詁学が後漢『釈名』以降の義書、訓詁学研究に言及することに消極的であったのは少々もったいない気がする）。

モノグラムとしての性格を有する第一章—第四章のそれぞれが扱う時代は、基本的に明代までである。それは、続く清代が「中国言語学史」上「前代までの研究成果を全面的に開花させた」時代であり、もはやモノグラムの形でその展開をたどることが不可能である、という考え方に基づく。従って、第五章は本章一章で音韻学（古音学、今音学、等韻学）、文字学（『説文解字』研究、金文・甲骨文研究）、訓詁学（語義研究、語源研究）そして中国の言語研究において萌芽が最も遅れた文法学、の各領域を一括して扱うことになったが、その際、各研究領域間相互の内的関連性（著者が最も重要視するのは、古音学の成立と成果をもたらした全領域の研究の進展である）および当時の研究環境を支えた外的要因（清朝の文化政策、経済の発達、西洋の研究手法の導入）を十分に考慮したことによって、本章は単なる清朝一代におけるモノグラムの列挙に終わることなく、優れた「清朝言語学史」としても通用する叙述となった。

残る第六章は、第五章までが伝統的な「中国語」研究の諸相を扱うものであったのに対し、中国が西洋の近代的言語学の方法を積極的に学ぶようになって以降の研究状況を叙述する。本章は、王書に

おける第四章 西学東漸的時期に相当するものであり(王書、第四章がアヘン戦争以降を扱うのに対し、本書、第六章はいわゆる五四新文化運動以降の時期を扱うという違いはある)、叙述の対象もほぼ一致しているが、王書に比べ、外来の新しい研究手法が中国人に与えた影響により注目した叙述がなされている。特に、前章で著者が重視した古音学を進展させたカールグレン(瑞)、マスペロ(仏)の研究の概要とそれらが中国人研究者に与えた影響についての記述は詳細である。

以上、叙述の構成——「骨組み」に注目して、本書の特徴を述べてみたが、当然、「骨組み」には「肉付け」が必要である。次に、その「肉付け」の方法を見て行くことにしよう。

○文化史的視点

著者は、本書の冒頭において繰り返し次のように語っている。

・本書が言うところの「中国言語学史」とは、漢民族の言語である所謂「中国語」を対象とする研究・著述の展開史のことであり、中国文化史研究の一環としての性格と役割を担っている。(前書き)

・この書は、中国語研究の展開史を、文化史の一環として位置付け、通観しようとするものである。(序章)

すなわち、文化史の一環として中国言語学史をとらえる、というのが著者の基本姿勢なのである。本書も、もちろんこの基本姿勢をいわば「基本設計図」として書き進められている。実は、先に明らかにした本書の類書とは異なる特長ある「骨組み」——構成も、この「基本設計図」に基づいて組み立てられたものであったのだった。それでは、一方の「肉付け」はこの「基本設計図」に基づいてどのように行われたのであろうか。

それを要領よく示すことはなかなか難しいことではあるが、私がかつて著者の『《辞書》の発明——中国言語学史入門』を評した際、著者によって語られた「中国言語学史」を貫く形成、発展の原理をまとめた次のような言葉、すなわち「伝統の遵守と革新的精神」、「規範の形成と脱規範の動き」、「権威的文化の存在とカウンターカルチャーの創出」——実はこれは中国文化そのものの形成、発展の原理でもある——は、本書における「肉付け」の方法を探るうえでも同様にキーワードとして認めることのできるものである。例えば、それを先に検討を加えた第二章 字書—文字学のなかで検証するならば、次のようになるだろう。

元来、権力による文字管理の必要性和密接な関係にあった字書「第一節 字書誕生前史—識字教科書の編纂」はやがて強大な統一王朝(漢)の成立による思想文化の統制(儒教の国教化)に応じて生じた学派(今文学派、古文学派)の争いのなかから一冊の規範的字書『説文解字』を生み出すことになった。該書は部首法の創案、「六書」による漢字の形態、構造の探求等の業績によっ

て、後世の学問に計り知れない影響を与えることになった。「第二節 字書の誕生—文字学の金字塔『説文解字』」。それは時代の要求に従って修正を加えられながらも継承し続けられた（西晋『字林』、梁『玉篇』、宋『類篇』）が、その理由は時代が下っても『説文解字』が示す漢字観が正当なものとして共感され続けたことによる。「第三節 『説文解字』の継承と展開」。一方、字書は依然として権力による文字管理と密接な関係にあり続けた。南北朝の混乱を経て再び統一王朝（隋、唐）が成立すると、規範意識に基づく楷書体の整理が始まることになった。いわゆる「字様書」と称されるものがそれである（唐『干禄字書』、『五経文字』、『新加九经字様』）。これらは、政治的統一に続く思想的統一と科挙のために必要とされたものであったが、『説文解字』の規範から乖離したということとで正当な著述として認められることはなかった。「第四節 字様書の誕生—楷書の規範化」。このように規範として君臨する『説文解字』に対して、文字検索の便利さの点で改新を図った字書が誕生した。それは、伝統的儒教の外（仏教、道教）にあった人物によって生み出され（遼『龍龕手鑑』、金『五音篇海』）、また実用性の追求のなかから生まれた（明『字彙』、『正字通』）。「第五章 字書の変容—『説文』からの離脱」。

すなわち、先秦以来の字書の歴史が、単なる文献紹介の形ではなく、文化の形成と発展のダイナミズムの文脈のなかで叙述されているのである。このように、文化史的視点に基づいた「肉付け」がおこなわれたことによって、本書の叙述は非常に厚みを加えたものと

なった。読者は、そこから言語学以外の中国文化に関わる様々な情報をも手に入れることができることであろう。

以上、幾つかの項目に焦点を当てる形で本書の特徴と魅力を語ってみた。私の力不足のため十分にその任を果たすことはできなかったが、本書の先駆的、画期的性格の一端はご理解いただけたのではないかと思う。

（一九九七年初版、一九九八年増訂版発行 汲古書院）

（岡山大学）